

大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷¹⁾

岡林 秀樹²⁾

1. 目的

本研究においては大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷を(1) パーソナリティ心理学、(2) 社会心理学、の2側面から検討する。

まず、第1の課題として、価値志向の構造について包括的な理論モデルを提出し、それを実証的に検討する。なお、このことを論ずるために、今まで未整理であった価値志向の内容(“構造的次元”)と表面的な形態(“機能的次元”)の問題について整理する。更に、個人に内在している価値志向と彼が認知する教育環境との関連についても検討する。そして、個人に内在化されている様々な価値志向と、その個人が環境を認知する特徴(“教育環境評価傾向”)との関連を、パーソナリティ心理学の課題として位置づける。

次に、第2の課題として、大学生に内在化している価値志向と彼らが認知する大学の教育環境の時代的変遷を明らかにする。すなわち、現代において

1) 本稿は、国際基督教大学大学院教育学研究科提出博士論文(岡林,1995)を、教育研究の投稿論文として纏め直したものである。

2) 本論文を作成するにあたり、学位論文の審査委員としてご指導頂きました国際基督教大学 原一雄教授(現:亜細亜大学)、藤永保教授、栗山容子教授、石本菅生教授に深く感謝致します。論文執筆に際し励まして頂きました心理学研究室の向井敦子先生、大井直子氏に深く感謝致します。英文抄訳についてご指導頂きました東京経済大学中村優治助教授に深く御礼申し上げます。調査に協力して下さった多くの学生の皆様と過去の調査資料を借用させて頂きましたICUの諸先輩方に深く感謝致します。

社会環境の移り変わりは激しく、急速な社会変動の中で如何に適應してゆくかが現代人に問われている。そして、それを論ずるためには以下の2つの問に答えなくてはならない。すなわち、戦後から現代に至るまで日本の大学生の価値志向に如何なる変遷が見られるだろうか。また、学生が日常生活を営む大学環境においても、学生数の増加や施設の拡大という物理的な変化だけでなく、それらに伴って如何なる（心理学的な）学園雰囲気の変遷が示されるだろうか。そして、大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷を、社会心理学の課題として位置づける。

具体的には、以下の6つの調査研究を行なう。

(1) パーソナリティ心理学的研究

研究 I. 観念的価値志向の構造

研究 II. 行動的価値志向の構造

研究 III. 観念的価値志向と行動的価値志向との関連

研究 IV. 価値志向と教育環境評価傾向との関連

(2) 社会心理学的研究 ——価値志向と教育環境の時代的変遷——

研究 V. 大学生の人生観の時代的変遷

研究 VI. 教育環境の時代的変遷

以上の各調査研究の相互関係を図示すると以下のようなになる（図1）。なお、本論文では紙面の都合上、研究IIを研究IIIの中で纏めて論じ、研究IVは概略のみを述べることにする。

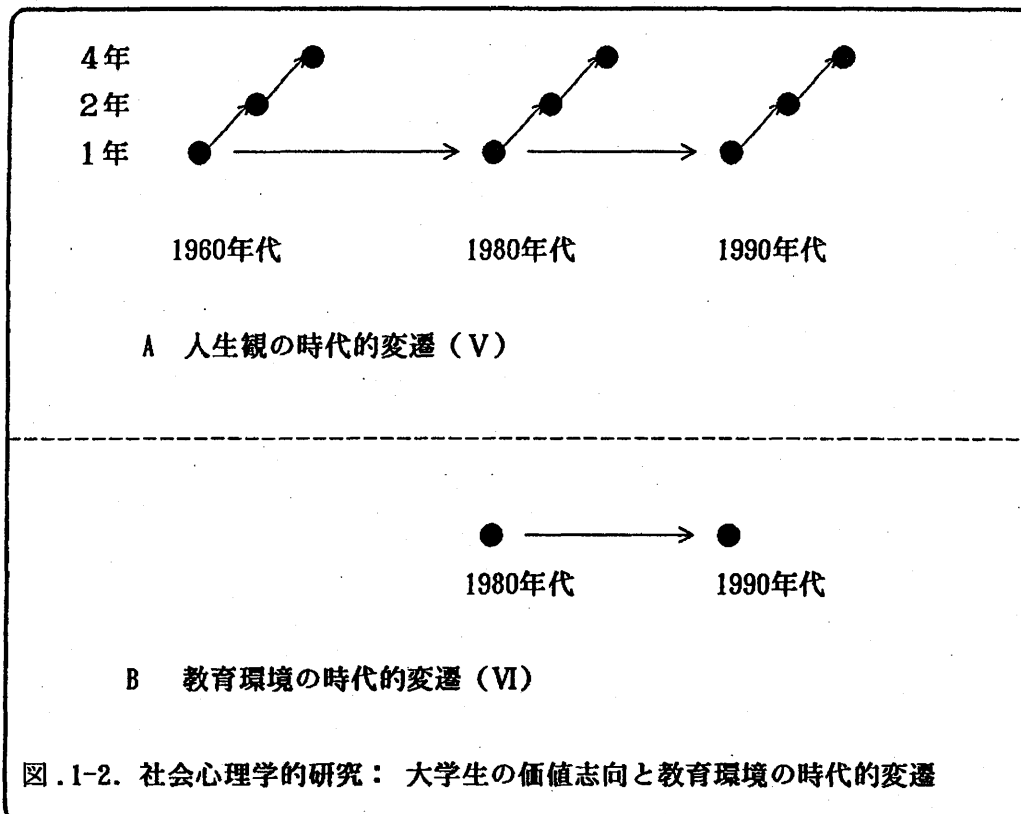
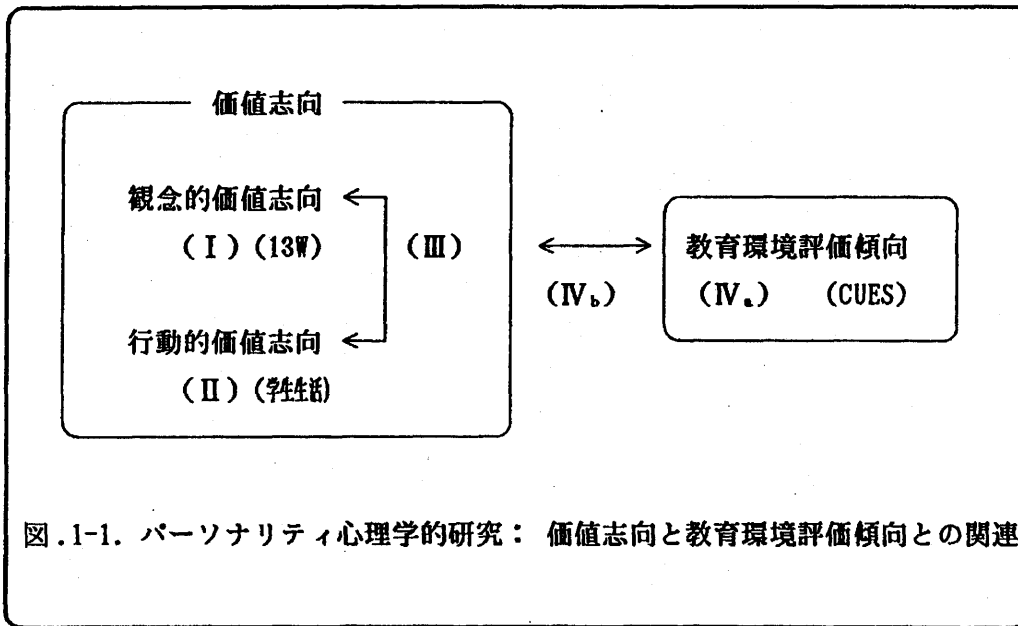


図1 本研究における各調査研究の相互関係

2. 調査方法

2. 1. 被験者

被験者群は実施時期ならびに用いた質問紙の種類によって大きく2つに分れる。研究Ⅰ、Ⅴ、Ⅵにおいては第1グループ、研究Ⅱ、Ⅲ、Ⅳにおいては第2グループを被験者として用いた。

第1グループは、60年代、80年代、ならびに1992年までの国際基督教大学（以下、ICUと略称する）の在学生のべ4,089名（内に、両親743と卒業生93名を含む）である。なお、その内、1960年代と1980年代の資料については、他の研究者（Troyer・藤田・北山・永野・原, 1963；Troyer・藤本・藤田, 1964；岩崎・石塚・原, 1984；植田・石塚・原, 1984）が収集した以下の4種の質問紙に対する個人回答を借用し再分析した。これらの被験者群は総て“13の生き方”質問紙に回答した。そして、その中の1部の被験者群は“宗教倫理観”・“政治経済観”・“教育環境”の3種の質問紙に対しても回答した。

第2グループは、1993年度におけるICU生591名とK大学生130名、およびC短大生232名の計953名である。これらの被験者群は共通して“13の生き方”（簡略版）・“学生生活に対する価値志向”・“教育環境”の3種の質問紙に回答した。

2. 2. 質問紙

2. 2. 1. 人生観質問紙

“13の生き方”質問紙（Morris, 1956）の日本語版、初版（原一雄訳、青木・萩原・箱田 [共著], 1974, Pp.126-129）および改訂版（岡林, 1991）は、いずれも古今東西の思想13類型を350字程度にまとめたものであり、評定尺度は7件法である。その略称は、見田（1966）に準じて“生き方”（以

下Lと略記)の順にL1(中庸)・L2(達観)・L3(慈愛)・L4(享楽)・L5(協同)・L6(努力)・L7(多彩)・L8(安楽)・L9(受容)・L10(克己)・L11(瞑想)・L12(行動)・L13(奉仕)とした(改訂版は初版の言葉遣いを現代風に改めたもので、内容的には同じと考えられるため、両質問紙とも、以下単に“13の生き方”質問紙とする)。更に、これらの各項目の内容を110字程度に要約した簡略版質問紙(以下“簡略版”と略称)を作成した(岡林・大井・原, 1993)。

2. 2. 2. 宗教倫理観質問紙

“宗教倫理観”質問紙はICU価値観研究グループ(Troyer 他, 1963, 1964)によって、それぞれ400字程度の文章からなる9項目が作成された。その略称は、“宗教倫理生活のみかた”(以下Rと略記)の順に、R1(自力本願仏教)・R2(神道)・R3(生活規範としての基督教)・R4(儒教)・R5(折衷主義)・R6(救済としての基督教)・R7(無神論)・R8(科学と宗教の調和)・R9(他力本願仏教)とした。評定尺度には7件法を用いた。

2. 2. 3. 政治経済観質問紙

“政治経済観”質問紙もICU価値観研究グループ(Troyer 他, 1963, 1964)によって、それぞれ570字程度の文章からなる6項目が作成された。その略称は、“政治経済のみかた”(以下Pと略称)の順に、P1(愛国主義)・P2(修正資本主義)・P3(共産主義)・P4(合理主義)・P5(社会主義)・P6(自由主義)とした。評定尺度には7件法を用いた。

2. 2. 4. 学生生活に対する価値志向質問紙

大学生が学生生活を営む上で問題意識をもつ可能性のある様々な心理学的課題に対する関与の程度を尋ねる質問紙で、33項目からなり、評定尺度には5件法を用いた(研究Ⅱ参照)。

2. 2. 5. 教育環境質問紙 (CUES)

“College and University Environment Scales” (Pace, 1967) の日本語版 (内藤, 1981) の 100 項目の中から、現代の大学環境の測定に適していると考えられる 75 項目 (5 カテゴリーそれぞれに対して各 15 項目) を選び出し、評定尺度は 1983 年度には 2 件法、1993 年度には 4 件法を用いた (以下、“CUES” と略称する)。

2. 3. 実施手続き

第 1 グループに対する調査の実施手続きは各年代において多少異なる。60 年代の被験者には大学の授業中に実施し、彼らの両親に対しては在学生を通して回答を依頼した。80 年代には学内の学生個人別通信用ボックス (以下、通信用ボックスとする) を通して質問紙を配布した。1990 年度の 1 年生 (入学予定者) と 60 年代に卒業生した同窓生には質問紙を郵送した。1993 年度の 1 年生 (入学予定者) とその両親にも質問紙を郵送した。90 年代の他の被験者は 80 年代と同じく通信用ボックスを通して配布した。

第 2 グループにおいては、1993 年度 5 月に、ICU においては総ての在学生に対して通信用ボックスを通して各質問紙を配布した。K 大学と C 短大においては授業中に各質問紙を配布した。

なお、質問紙への回答は、両グループとも、授業中に配布した者は当日回収したが、通信用ボックスを用いて配布した者には回収箱を通して、また、郵送で配布した者には同じく郵送で返送させることによって、後日回収した。

3. 個別調査研究

3. 1. パーソナリティ心理学的研究（研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）

心理学の研究課題として、価値志向についての実証的研究は今までに数多く行なわれてきており、抽象的で観念的な人生観については Morris (1956) の“13の生き方”質問紙、日常的な意識を測定するものとしては Allport & Vernon (1931) の“価値興味尺度”など、数多くの尺度が開発され研究が進められてきた。しかし、それぞれの研究において価値志向の構造と仮定されてきた因子構造は、各調査研究で用いられた項目と標本として選出された被験者の性質に依存しており、普遍的なものとは言い難い。価値志向の研究を心理学的に発展させるためには、各研究で見出された価値志向の因子が相互に如何なる関連を持っているのか、“価値”はどのような秩序をもって分化し多様化してくるのか、ということに関して理論的な検討を行ってゆくことが必要であると思われる。したがって、具体的には、各研究で見出された因子を整理する枠組みとして、より高次の理論モデルを構築することが必要となる。すなわち、価値志向についての包括的な理論モデルを新に提出することが現時点における課題と考えられる。

様々な実証的研究を包括しうる理論モデルを構築するためには、“価値志向そのものの内容に関する問題”と“状況や場合による表れ方に関する問題”を区別する必要がある。本研究においては、見田(1966)に準じ、前者を“構造的次元”と後者を“機能的次元”と称する。本研究では、まず、“構造的次元”における理論モデルの検討を行ない(研究Ⅰ)、次に、価値志向は“機能的次元”において多種多様な表れ方をするが、“構造的次元”においては対応関係がみられるという仮定について検討する(研究Ⅱ、Ⅲ)。そして、更に大学生の抱く価値志向と個々の大学生が自分を取り囲む大学環境を認知する特徴との関連を検討する(研究Ⅳ)。

3. 1. 1. 研究 I. 観念的価値志向の構造³⁾

“構造的次元”とは価値志向の基本的内容についての次元である。Morris (1956) は、価値の基本要素として“ブッダ”・“ディオニソス”・“プロメテウス”という3要素を仮定し、それらの組み合わせから13の人生哲学からなる質問紙を作成した。米国・インド・中国・日本・カナダ・ノルウェーなどの世界各国の大学生に対する比較文化的調査により、文化の違いにかかわらず共通した5因子（中国においては6因子）を抽出し、更にそれらの因子を2つの志向（自己へ・自己以外へ）と3つのカテゴリー（超越・依存・支配）から構成される2×3のマトリックスに分類した。また、見田（1966）は、“現在”と“自己”をそれぞれ相対化することによって初めて多様な価値志向が生ずると考え、“時間的パースペクティブ”（現在・未来）と“社会的パースペクティブ”（自己・社会）という2つの概念を導入し、この2つのパースペクティブの組み合わせから4つの価値類型（快・利・愛・正）を演繹的に導出した。そこで、本研究においては上記の両理論を統合し価値志向の“構造的次元”における理論モデルを構築する。すなわち、まず Morris の“(自己へ・自己以外への) 志向”と見田の“社会的パースペクティブ”を対応させ、次に見田の“時間的パースペクティブ”に“過去”という概念を追加し、Morris の3カテゴリーと対応させる（表1）。ここでは、再構成した“時間的パースペクティブ”と Morris の3カテゴリーとの対応関係を以下のように考える（なお、Morris はこれらの3カテゴリーに明確な定義を与えていないため、含まれる因子の内容からカテゴリーの意味を推測した上で以下の対応づけを行った）。つまり、“過去”は、過去の経験（伝統）を見つめ直す意味もつため“超越”と、“現在”は、現在における快の充足を重視するものなので“依存”と、“未来”は将来的な理想・目標に向けて現時点における快を抑えて努力することを意味するので努力や協力を意味する“支配”と、それぞれの概念どうしが対応すると考えられる。

3) 研究 I は、日本青年心理学会第2回大会において口頭発表した内容（岡林，1994）を加筆修正したものである。

表1 構造的次元における価値志向の理論モデル

時間的パースペクティブ	社会的パースペクティブ		
	自己	他者	
過去	見田 (--) Morris (超越)	内省 --- C. 離退と自己満足	伝統 --- A. 社会的規制と自己統制
現在	見田 (現在) Morris (依存)	快楽 快 E. 自己耽溺	愛他 愛 D. 受容と同情的関心
未来	見田 (未来) Morris (支配)	努力 利 B 2. 自己の努力と行動	正義 正 B 1. 協力的な活動

*下線は本研究において“時間的パースペクティブ”と“社会的パースペクティブ”の組合わせから演繹される価値志向の6類型

* () は本研究の“時間的パースペクティブ”に対応する Morris および見田のカテゴリー名

* A~E は Morris の6因子

研究Iでは、4つの調査研究(研究I-1~4)を行なうことによって、“観念的価値志向”の構造を検討した。ここでは主として研究I-4を論じ、研究I-1~3まではその概要のみを述べる。

“I-1. 人生観の因子構造”においては、“人生観”の4因子構造(表2)がどの時代の被験者群にもあてはまるか否かを検討した。“I. 慈愛奉仕”・“II. 内面生活”・“III. 積極行動”・“IV. 安楽多彩”の4つの因子が各被験者群に安定して見出され、この4因子構造を基にして“人生観”を分析してゆくことの適切さが確認された(原・大井・岡林, 1991, 1992; 岡林・原・大井, 1991; 岡林・大井・原, 1992, 1995; 大井・原・岡林, 1991; 大井・岡林・原, 1992, 1994)。

表2 13の生き方の因子負荷量 (n = 4,089)

	I	II	III	IV	共通性
L13 奉仕	.72	-.01	.13	.02	.53
L 3 慈愛	.66	.09	.01	-.01	.44
L 1 中庸	.55	.05	-.17	.28	.42
L10 克己	.52	.18	.12	-.24	.38
L 4 享楽	-.48	.41	.25	.19	.52
L 2 達観	-.02	.73	-.05	-.10	.55
L11 瞑想	.16	.70	-.00	-.04	.52
L 9 受容	.09	.58	-.06	.38	.50
L 6 努力	.11	-.00	.75	-.11	.59
L12 行動	-.17	.04	.71	.08	.54
L 5 協同	.38	-.26	.54	.14	.53
L 8 安楽	.04	.14	.00	.76	.60
L 7 多彩	-.07	-.12	.05	.70	.51
固有値	2.03	1.80	1.51	1.33	
寄与率(%)	15.7	13.9	11.7	10.3	
累積寄与率(%)	15.7	29.6	41.2	51.5	

“I-2. 人生観のSD法による分析”においては、“13の生き方”に対するSD法の反応から大学生の“人生観”の意味の次元を抽出し、13項目間の関係を検討した。抽出された3次元(評価・活動・力量)に基づいたクラスタ分析の結果からは、研究I-1で見出された4因子構造とは異なる4クラスターが析出された。このことはSD法の活動次元において項目に対する被験者の反応傾向が異なったためと考えられた(原・大井・岡林, 1992)。

“I-3. 13の生き方質問紙(簡略版)の妥当性の検討”においては、“簡略版”は、因子構造においては“13の生き方”質問紙と多少の相違が見られたが、一応の基準関連妥当性が認められたため、現代の大学生の“人生観”

を測定し得ると考えられた（岡林・大井・原，1993）。

本研究（研究Ⅰ－4）の目的は、抽象的・観念的な文脈における価値志向であると考えられる“人生観”と“宗教倫理観”および“政治経済観”における共通の構造を見出し、“観念的価値志向”の基本構造について検討することである。Morris（1956，1971）は“人生観”について世界各国の大学生に対する比較文化的な研究および時代的変遷の検討を行なったが、そこで彼が用いた“13の生き方”質問紙は古今東西の思想・宗教を内包した豊かな内容を持つため、我が国においてもその翻訳版（安藤，1978，1990；土橋，1982；原・大井・岡林，1991，1992，1993；岩崎・石塚・原，1984；岡林，1991；岡林・原・大井，1991；岡林・大井・原，1992，1995；大井・岡林，1995；大井・原・岡林，1991；大井・岡林・原，1992，1993，1994；Troyer他，1963）あるいは翻訳版を簡略化したもの（石田・岡林・大井・原，1994；梶田，1990；村山，1976；岡林・大井・原，1993，1994b；高木・加藤，1980，1983；山田・浅井，1989）を用いて数多くの研究が行なわれてきた。

研究Ⅰ－1～3においても論じたように、原・大井・岡林によるICUにおける価値観研究グループは、60年代、80年代、90年代という異なる年代の被験者群に共通に安定して見出された“Ⅰ．慈愛奉仕”・“Ⅱ．内面生活”・“Ⅲ．積極行動”・“Ⅳ．安楽多彩”の4因子構造を、人生観の基本的構造と捉えてきた（原・大井・岡林，1991，1992；岡林・原・大井，1991；岡林・大井・原，1992，1995；大井・原・岡林，1991；大井・岡林・原，1992，1994）。しかし、調査項目が比較的少ない（13項目）ために4因子以上の安定した構造を見出すのが統計的に困難であったとも考えられる。そこで、本研究において、“人生観”（13項目）に“宗教倫理観”（9項目）と“政治経済観”（6項目）を加えた時、新たな要因が見出されるか否かを検討する。具体的には、因子分析によって、“人生観”と“宗教倫理観”および“政治経済観”について、新たな要因を抽出し、更に、抽出された各因子が相互にどのような意味的な関連を持っているかを、前述した理論モデルと対応させて考察することとする。

方 法

被験者 前記（2. 1. 被験者）の第1グループの内、下記3種の質問紙に回答したICU在學生と卒業生1,922名を被験者とした。

質問紙 “13の生き方”・“宗教倫理観”・“政治経済観”の3種の質問紙を用いた（2. 2. 質問紙 参照）。

手続き 前記（2. 3. 実施手続き）の第1グループに対する手続きに従った。

結果および考察

全被験者の評定得点を基に、28項目に対する評定値間の相関マトリックスを求めた。新たな要因の抽出を試みるため、28項目に対する評定値間の相関マトリックスを基に、因子数を6に設定して、主因子法による因子分析を行ないバリマックス回転を施した（表3）。

高因子負荷量（ $>.30$ [絶対値]）を示した項目から各因子の解釈と命名を試みる。第I因子は、基督教精神に基づいた愛他的精神を読み取ることができる。このことからこの因子を“基督教的愛他主義”と命名する。これは、前述の“人生観”の4因子における“慈愛奉仕”と対応する。第II因子においては、特定の主義に偏らず現実に柔軟に対応しつつ快楽を享受する、という現実的な快楽傾向を読み取ることができ、これを“現実的快楽主義”と命名する。これは“人生観”の因子分析における“安楽多彩”と対応する。第III因子においては、現実から逃避して自分自身の内面的な精神生活を営むことを重視する、というもので、“現実逃避的内面生活”と命名する。これは“人生観”因子の“内面生活”に対応する。第IV因子においては、人々と協力し社会正義を実現することを重視する、という傾向を読み取ることができ、これを“社会正義・協同主義”と命名する。これは“人生観”因子の“積極行動”に対応する。第V因子においては、理想を実現するために自分を厳しく律する、という意味を持っていると考えられ、これを“自己規制的理想主

表3 人生観・宗教倫理観・政治経済観の因子負荷量 (n = 1,922)

項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性
R 6 救済	.86	-.10	.10	-.04	-.03	.00	.77
R 3 生活	.80	.05	.02	-.07	.08	.03	.65
L 3 慈愛	.47	.06	-.03	-.04	.31	.12	.34
R 7 無神論	-.45	-.12	.08	.33	-.03	.09	.35
L13 奉仕	.44	.08	-.06	-.00	.39	.14	.38
R 5 折衷	-.11	.53	.01	.12	.27	.10	.39
R 8 調和	.12	.53	.03	-.02	.19	.02	.34
L 7 多彩	-.04	.48	-.04	.06	-.06	.08	.25
P 4 合理主義	-.00	.47	.01	-.06	-.01	-.00	.22
P 2 修正資本主義	.19	.35	-.03	-.01	.16	-.08	.19
P 6 自由主義	.09	.32	.01	-.04	-.15	.29	.22
L 8 安楽	.00	.32	.15	.02	-.11	.29	.22
L11 瞑想	.01	-.04	.53	-.04	.13	.02	.30
L 2 達観	-.02	.02	.53	-.06	-.07	.07	.29
L 9 受容	.02	.09	.48	-.04	-.11	.26	.32
R 9 他力本願	.15	-.11	.33	.11	.12	.09	.18
L 6 努力	-.03	-.01	-.12	.52	.04	.13	.30
P 3 共産主義	-.11	-.35	.19	.44	.16	-.05	.40
L12 行動	-.09	.07	.01	.44	-.07	.03	.22
L 5 協同	.13	-.02	-.30	.38	.18	.30	.37
L 4 享楽	-.20	.11	.34	.28	-.40	.05	.42
L10 克己	.16	.06	.04	-.01	.36	.09	.17
P 5 社会主義	.06	.07	.02	.24	.34	-.22	.23
R 1 自力本願	-.08	.15	.29	.09	.33	.23	.29
R 2 神道	-.05	.04	.14	.09	.13	.47	.27
P 1 愛国主義	.05	-.00	.11	.09	.00	.33	.14
L 1 中庸	.17	.30	.01	-.18	.12	.31	.26
R 4 儒教	.28	.15	.17	.10	.20	.29	.27
固有値	2.93	1.97	1.45	1.30	.71	.53	
寄与率(%)	10.5	7.1	5.2	4.7	2.6	1.9	
累積寄与率(%)	10.5	17.5	22.7	27.4	30.0	31.9	

義”と命名する。第VI因子においては、日本の伝統文化を重視する傾向を読み取ることができ、この因子を“日本的伝統主義”と命名する。

第V因子と第VI因子は、“人生観”の4因子との対応が見出されない新たな因子であり、これらは、“政治経済観”(6項目)と“宗教倫理観”(9項目)という変数群を加えることによって13項目という少数の項目間の関係からは見出すことができなかった潜在的な因子と考えられる。

更に、“人生観”と“宗教倫理観”および“政治経済観”から抽出された6因子を価値志向の“構造的次元”における理論モデルによって整理し、更にMorris(1956)と見田(1966)の理論的構造にも対応させた(表4)。この理論モデルには、研究I-1~3までに見出された総ての因子が包含され、かつ“時間的パースペクティブ”と“社会的パースペクティブ”から演繹される総てのマトリックスに対応する因子が見出されている。このことから、ここで得られた構造を“観念的価値志向の基本構造”と考えることができると思われる。

なお、本稿では詳しく述べないが、各項目の結合過程を検討するために階層的クラスター分析を施した結果、因子分析とほぼ同じ構造が見出され、更に現在・過去・未来という時間軸の上で価値志向の各クラスターが結合し形成されている点が読み取れた。つまり、このことは“社会的パースペクティブ”の方が“時間的パースペクティブ”より類似性が強い(逆に言えば“時間的パースペクティブ”のカテゴリーの方が“社会的パースペクティブ”のカテゴリーより排反性が強い)ことを示していると考えられる。このことから(基本的要素は独立して存在すると考えれば)、価値志向の基本要素として“時間的パースペクティブ”の方が“社会的パースペクティブ”より基本的であると考えられる。

Morrisにおいて価値志向の基本要素と考えられてきた“ブッダ”・“ディオニソス”・“プロメテウス”(あるいは、“超越”・“依存”・“支配”)がそれぞれ“過去-現実-未来”に対応した時間軸を形成し、その3カテゴリーから、“自己志向-他者志向”の軸が分化することによって、最終的に

表4 観念的価値志向の基本構造（人生観・宗教倫理観・政治経済観）

時間的 パースペクティブ	社会的 パースペクティブ		
	自己志向	他者志向	
見田(1966)	--	--	
過去	Morris(1956) (超越・ブッガ')	C. 内面的精神生活 による自己満足 (瞑想・達観・受容)	A. 社会的抑制 と自己抑制 (中庸・克己・慈愛)
	因子	III. <u>現実逃避的内面主義</u>	VI. <u>日本の伝統主義</u>
	人生観	達観・享楽・協同(-) 受容・瞑想	中庸・協同
	宗教倫理観 政治経済観	他力本願	神道 愛国主義
見田(1966)	(快)	(愛)	
現在	Morris(1956) (依存・デ・イオニス)	E. 自己耽溺 (安楽・享楽)	D. 受容協調・同情関心 (奉仕・受容・慈愛)
	因子	II. <u>現実的快楽主義</u>	I. <u>基督教的爱他主義</u>
	人生観	中庸・多彩・安楽	慈愛・奉仕
	宗教倫理観	折衷・調和 無神論	生活規範・救済 無神論(-)
政治経済観	修正・共産(-) 合理・自由		
見田(1966)	(利)	(正)	
未来	Morris(1956) (支配・ブ・ロメテウス)	B ₂ . 自己の努力と行動 (行動・努力)	B ₁ . 協力的な活動 (協同・慈愛・努力)
	因子	V. <u>自己規制的理想主義</u>	IV. <u>社会正義・協同主義</u>
	人生観	慈愛・享楽(-) 克己・奉仕	協同・努力・行動
	宗教倫理観 政治経済観	自力本願 社会主義	無神論 共産主義

6つの価値志向の類型が形成されたのではないかと考えられる。“日本の伝統主義”と“自己規制的理想主義”は4因子構造で考えるとそれぞれ“現実逃避的内面主義”と“社会正義・協同主義”に包含される比較的弱いカテゴリーと考えられる。つまり、逆に言えば、それぞれの因子は、“人生観”の4因子構造における“内面生活”が“現実逃避的内面主義”と“日本の伝統主義”に、“積極行動”が“自己規制的理想主義”と“社会正義・協同主義”にそれぞれ分化したものであると考えられる。

3. 1. 2. 研究Ⅲ. 観念的価値志向と行動的価値志向との関連⁴⁾ (研究Ⅱも含む)

人はある選択事態において1つの行動を意識的あるいは無意識的に選択する。この時に、パーソナリティに内面化されている選択の基準のことを価値志向と考えることができる。人は状況に応じて行動傾向を変化させるが、逆に一人の人間が様々な状況で行う選択にはある一貫した傾向が見出されるとも考えられ、すなわちそれを価値志向の体系とすることができるだろう。価値志向は心理学的構成概念であるので、人が選択を迫られる状況のどのような側面に焦点をあてるかによって、いくつもの異なる価値志向の概念が産みだされている。

選択状況を、現実には縛られることのない抽象的・観念的な生き方にするのか(Morris, 1956)、より具体的・日常的な場面にするのか(Allport & Vernon, 1931)、就職に際して職業を選ぶ場面にするのか(Rosenberg, 1957)によって、いくつもの価値志向が生まれている。また、Rokeach (1973)の手段的価値と目的的価値、ゴードンと菊池(1981)の個人的価値と対人的価値などのように、選択状況を理論的に2つに分けてそれらを組み合わせることによって、より包括的に価値志向を測定しようとする研究者もいる。

このように、各研究者が焦点をあてている選択状況の違いによって様々な

4) 研究Ⅲは、日本青年心理学会第2回大会と日本心理学会第58回大会において口頭発表した内容(岡林, 1994; 岡林・大井・原, 1994b)を加筆修正したものである。

価値志向概念が生みだされているが、様々な選択状況を通じて一貫した行動傾向が見出されるのか否か、そして種々の価値志向を統合する際に用いられるフレームワークは如何なるものかについての議論は、現在の価値志向の研究においては未だ不十分であると考えられる。

前述のように、様々な実証的研究を包括しうる理論モデルを構築するためには、“価値志向そのものの内容に関する問題”（構造的次元）と“状況や場合による表れ方に関する問題”（機能的次元）を区別する必要がある。そうすることによって、価値志向は“機能的次元”において多種多様な表れ方をするが、“構造的次元”においては対応関係がみられるということが仮定できる。“構造的次元”とは、価値志向の基本的内容についての次元である。本研究においては研究1で提出した時間的パースペクティブ（過去・現在・未来）と社会的パースペクティブ（自己・他者）という3×2のマトリックスからなる価値志向の“構造的次元”における理論モデルを採用する。

“機能的次元”とは状況によって変りうる価値志向の表面的な形態についての次元のことである。様々な“機能的次元”が考えられるが、本研究においてはその中の“行動性”を扱う。“行動性”とは価値志向が具体的・現実的であるか抽象的・観念的であるかの水準のことである。この“行動性”の水準は連続的なものであるが、本研究では、“行動性”の高い方の極を“行動的価値志向”とし、“行動性”の低い方の極を“観念的価値志向”とし、水準の異なる2つ価値志向において、“構造的次元”における対応関係を検討する。

価値志向の“構造的次元”と“機能的次元（行動性）”との仮説的關係を図2に示した。ここでは、表面的な形態（機能的次元：行動性）は変化（観念的価値志向↔行動的価値志向）しても、“時間的パースペクティブ”と“社会的パースペクティブ”から構成される価値志向の基本的構造（構造的次元）は変わらないという仮定を示している。

前述（研究I）のように、大学生の“人生観”についてはMorris（1956）の“13の生き方”質問紙（または、その改訂版）を用いて今まで数多くの

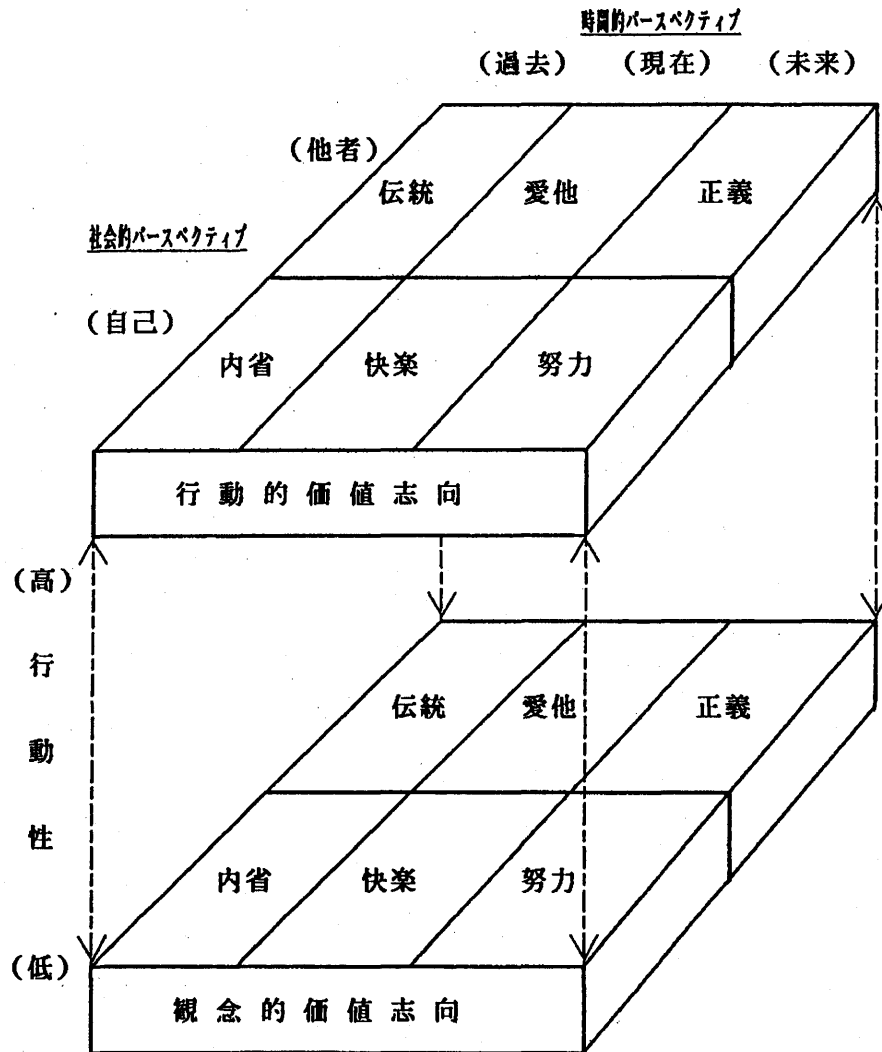


図2 観念的価値志向と行動的価値志向の仮説的関連

研究が行なわれてきた。しかし、“13の生き方”質問紙はその項目の内容が観念的・抽象的であるため、現実の意識・行動との関係が薄いのではないかと言われてきた（見田，1966；山田・浅井，1989）。また、岡林（1991）においても、大学生の“人生観”と日常の学生生活における学生の意識との乖離が再度指摘された。

個人の中に一貫した価値志向の体系が存在しているとすれば、大学生の抱く“人生観”と日常的な学生生活における態度には関連がみられるはずであるが、上記のように先行研究においてははっきりした関連が見出されていない。この原因は先行研究が用いている分析方法——両変数群間の単純相関あるいは両変数群を込みにした因子分析——にあるのではないかと考えられる。そこで、本研究においては、“機能的次元”（行動性）において異なる水準である“人生観”（観念的価値志向）と“学生生活に対する価値志向”（行動的価値志向）は“構造的次元”においては共通するところもあると仮定し、正準相関分析を用いて両価値志向の潜在的な関連を見出すことを試みる。

方 法

被験者 前記（2. 1. 被験者）の第2グループの有効回答者 878 名を被験者とした（1993 年度実施）。

質問紙 “簡略版”と“学生生活に対する価値志向”質問紙を使用した（2. 2. 質問紙参照）。

手続き 前記（2. 3. 実施手続き）の第2グループに対する手続きに従った。

結果および考察

まず、“学生生活に対する価値志向”質問紙 33 項目の評定得点から算出した内部相関マトリックスを基に、主因子法による因子分析を行ない初期解において固有値 1.00 を基準に因子数を打ち切ったところ 8 因子が得られた。更に単純構造を求めるためにオブリミン法による斜交回転を施し、因子を構成する項目の内容から、因子の順に“Ⅰ. ボランティア”・“Ⅱ. 実用性”・“Ⅲ. 社会意識”・“Ⅳ. 親和性”・“Ⅴ. 遊交”・“Ⅵ. 独立”・“Ⅶ. 知的好奇心”・“Ⅷ. リーダーシップ”とそれぞれ命名した（表 5）。

次に、“学生生活に対する価値志向”質問紙の 8 因子と人生観の 13 項目との潜在的関連が検討された。正準相関分析の結果（図 3）、2 つの質問紙か

表5 学生生活に対する価値志向の因子パターン (n = 932)

項目	I イランティ	II 実用性	III 社会意識	IV 親和性	V 遊交	VI 独立	VII 知的好奇心	VIII リーダーシップ	共通性
GA18 ボランティア	.60	.02	.09	.15	-.02	-.07	-.07	-.10	.46
GA15 地域社会	.51	-.02	.09	-.05	.01	.03	.02	.13	.35
GA17 仲間と協力	.34	.07	-.08	.27	.04	.02	-.05	.27	.43
GA19 良い成績	-.05	.54	.06	.03	-.01	-.04	.11	-.00	.31
GA24 社会常識	-.00	.48	.11	.05	.28	.23	-.17	-.00	.58
GA20 尊敬できる先生	.05	.43	.00	.09	-.11	-.03	.38	.11	.42
GA25 役立つことを学ぶ	.34	.41	.10	.08	-.03	.10	-.08	.08	.53
GA22 実用的知識・技術	.14	.33	.16	.01	.35	-.05	-.10	-.08	.45
GA27 進路への準備	.08	.37	.08	-.01	.11	.14	.04	.12	.33
GA29 目上の人への礼儀	.20	.34	.01	.05	.18	.08	-.17	.01	.33
GA33 他者からの支持	.05	.33	-.06	.18	.07	.04	-.12	.24	.33
GA12 国際社会の動き	.07	-.01	.34	-.02	.01	.02	.00	.02	.75
GA 8 政治・経済の動向	-.01	.02	.31	.03	-.05	-.02	-.03	.04	.66
GA30 他民族・人種問題	.36	.02	.36	.07	-.06	.12	.16	-.13	.51
GA 2 暖かい人間関係	-.04	-.05	.04	.33	.01	-.04	-.01	.01	.34
GA 1 親切な行動	.10	.06	.06	.56	-.06	.11	-.01	-.00	.45
GA23 友人との友情	.11	.04	-.02	.47	.20	.07	-.04	.12	.47
GA 5 社交的な関係	-.11	-.03	.16	.33	.23	-.09	.20	.28	.51
GA28 遊び楽しむ	.04	.03	-.14	.12	.58	.06	.08	-.01	.40
GA21 ファッション・娯楽	-.00	.18	.06	-.01	.51	-.18	-.04	.00	.34
GA11 異性との恋愛	-.09	-.06	.07	.01	.37	.09	-.09	.25	.28
GA13 様々なことに挑戦	.11	-.13	.11	.11	.30	.11	.15	.13	.31
GA31 自分で決める	-.11	.07	.04	.10	-.02	.68	-.05	-.08	.44
GA16 自分なりの考え方	.05	.00	.06	-.03	-.09	.61	.08	.13	.51
GA32 異なる立場の尊重	.11	.03	-.02	.20	-.11	.45	.18	-.04	.41
GA14 一人の精神生活	.17	-.18	.02	-.13	.09	.42	.11	.03	.32
GA 8 親からの精神的自立	-.01	.08	.07	.02	.09	.39	.15	.10	.35
GA10 好奇心から専門研究	.09	.08	.14	-.09	-.10	.15	.58	.07	.58
GA 9 芸術・文化への関心	.13	-.01	.07	-.01	.07	.14	.55	-.05	.48
GA 4 幅広い教養	-.11	.08	.29	.20	-.05	.18	.41	.04	.55
GA 7 興味に基づく読書	.03	-.04	-.03	.06	.24	.25	.34	-.01	.34
GA 3 リーダーシップ	-.03	.00	.10	.09	-.02	-.02	-.02	.54	.38
GA28 良きライバル関係	.28	.14	-.03	-.04	.01	.08	.15	.40	.39
固有値	7.68	2.42	1.24	.95	.83	.62	.54	.48	
寄与率 (%)	23.3	7.3	3.7	2.9	2.5	1.9	1.6	1.4	
累積寄与率 (%)	23.3	30.6	34.3	37.2	39.7	41.6	43.3	44.7	

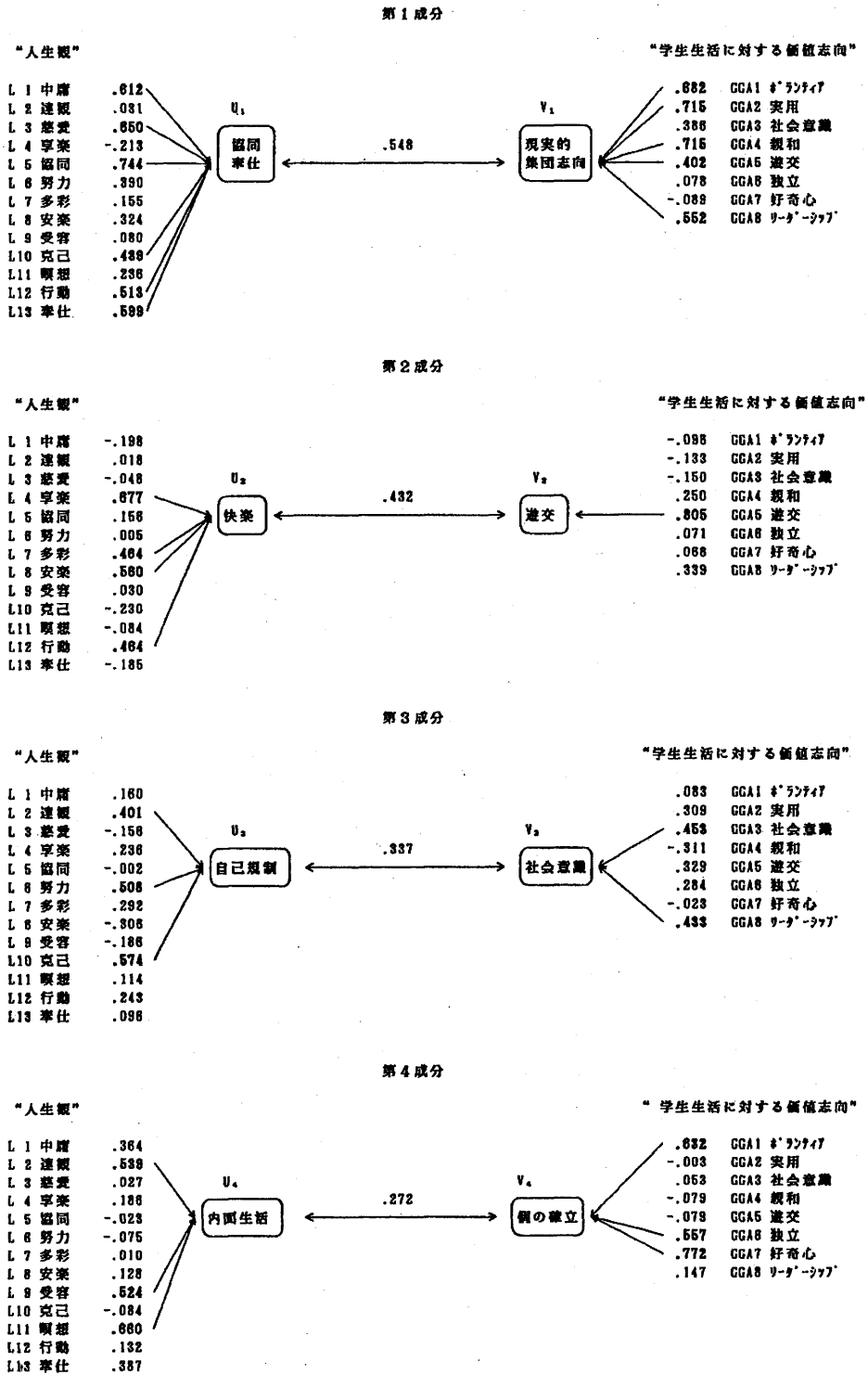


図3 人生観と学生生活に対する価値志向とのパス図

らそれぞれ4つの成分が抽出されたが正準変数と高い相関(.40以上)を持つ項目の内容を手がかりに各成分の命名を試みると、“Ⅰ. ‘協同奉仕’と‘現実的集団志向’”・“Ⅱ. ‘快樂’と‘遊交’”・“Ⅲ. ‘自己規制’と‘社会意識’”・“Ⅳ. ‘内面生活’と‘個の確立’”と称することができ、それぞれの正準変数の関係は意味的に解釈が可能である。

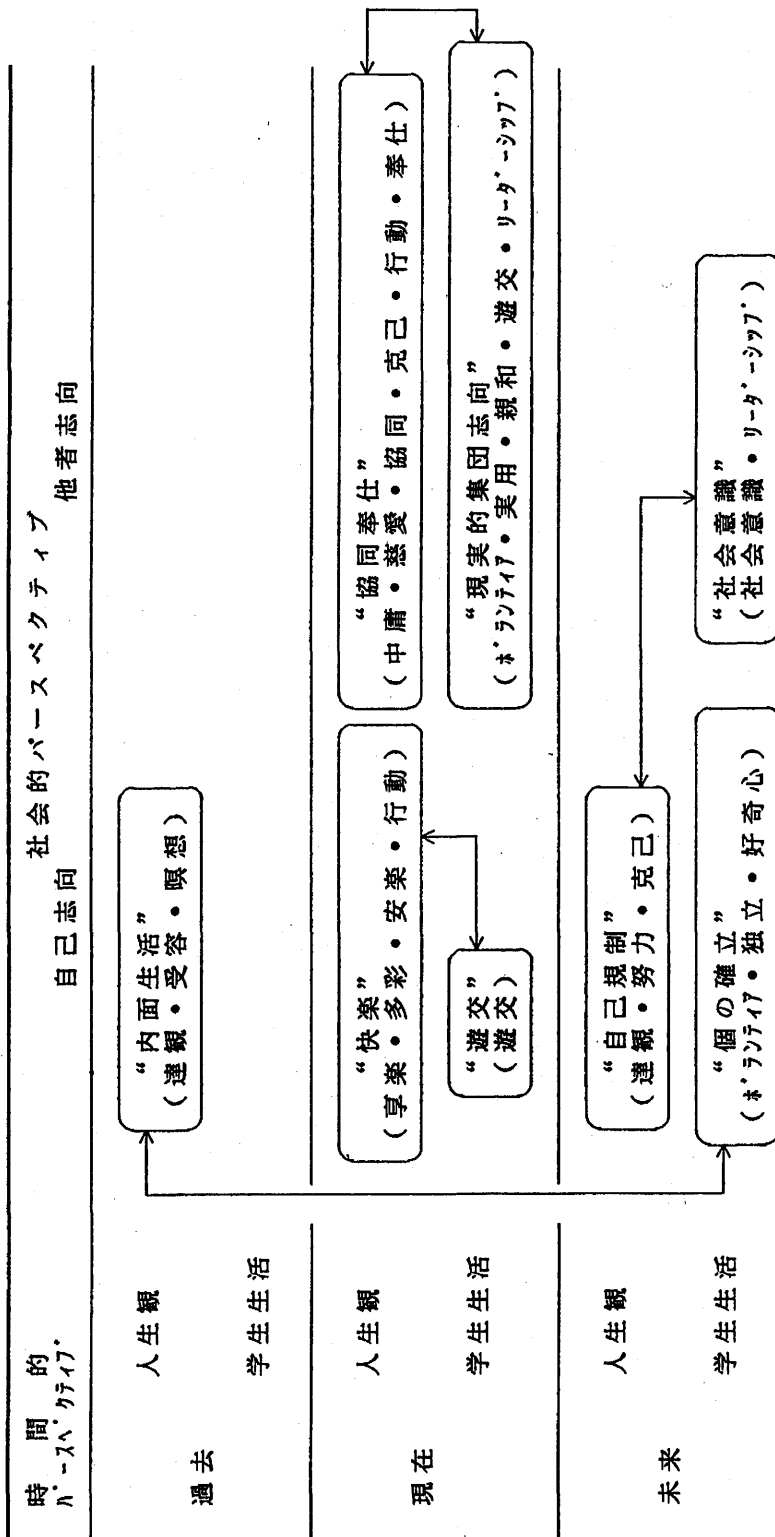
これらの関係を“時間的パースペクティブ”と“社会的パースペクティブ”によって整理する(表6)。表6より、“協同奉仕”と“現実的集団志向”、“快樂”と“遊交”は同一象限に配置される。そして、“自己規制”と“社会意識”は“社会的パースペクティブ”においては“自己”と“他者”に分れるが、“時間的パースペクティブ”においては同じパースペクティブに入る。“内面生活”と“個の確立”は、“社会的パースペクティブ”においては、両者とも“自己志向”であるが“時間的パースペクティブ”においては“過去”と“未来”に分れる。これは人生という長い時間において自らを確立するためには“過去”の統合が重視されるが、学生生活においては“未来”における生活の自立によって自らを確立することがより重視されるためと思われる。

本研究においては、正準相関分析を用いることによって、“人生観”と“学生生活に対する価値志向”、すなわち“観念的価値志向”と“行動的価値志向”という“機能的次元”(“行動性”)の水準が異なる2つの価値志向の間に密接な潜在的関連性を見出すことができたと考えられる。おそらく、今までの研究において、この関連性が明らかでなかったのは分析方法が適切でなかったためであろう。このように、両価値志向の間に潜在的関連が見出されたことから、学生の中に一貫した価値体系の存在が確認され、“観念的価値志向”が単に抽象的な次元として日常的な価値志向から遊離してはいないことが明らかになった。

3. 1. 3. 研究Ⅳ. 大学生の価値志向と教育環境評価傾向との関連

人が抱く価値志向とその人の環境の認知には関連が見られる(Bruner &

表6 観念的価値志向と行動的価値志向との関連



Goodman, 1947)。すなわち、学生の価値志向はその学生が大学の教育環境を如何に評価するかに影響を及ぼしていると思われる。そして、具体的・日常的な価値志向の方が、抽象的な価値志向よりも、日常的な環境の認知である“教育環境評価傾向”と、より強い関連をもっていると思われる。このような価値志向と“教育環境評価傾向”との関連を探索的に検討するのが本研究の目的である。

方 法

被験者 前記(2. 1. 被験者)の第2グループの有効回答者758名を被験者とした(1993年度実施)。

質問紙 “簡略版”・“学生生活に対する価値志向”質問紙・“CUES”を用いた(2. 2. 質問紙参照)。

手続き 前記(2. 3. 実施手続き)の第2グループに対する手続きに従った。“CUES”においては、3つの大学で共通の枠組みで分析を行なうため、各個人の評定得点から、各大学別の2年次以上の学部学生による平均評定得点を引いて、個人毎に“教育環境評価傾向”得点を算出した。

結果および考察

上記の“教育環境評価傾向”得点を基に因子分析を行なった結果、“I. 教授に対する評価”・“II. 学生の仲間意識への評価”・“III. 学内の規律への評価”・“IV. 講演会への関心に対する評価”・“V. 学生の自覚に対する評価”・“VI. 授業の知的レベルに対する評価”・“VII. 大学への帰属意識に対する評価”の7因子が抽出された。

“人生観”の13項目および“学生生活に対する価値志向”の8因子と、“教育環境評価傾向”の7因子との関係を正準相関分析によって検討した。その結果、まず、“人生観”および“学生生活に対する価値志向”と、“教育環境評価傾向”のそれぞれの第1成分は、他者への奉仕や協調を尊ぶ、いわゆる“社会的望ましさ”の成分と考えられ、それらの価値を肯定的にとらえる学

生には、自分の所属する教育環境を肯定的に評価する傾向が見られた。次に、“学生生活に対する価値志向”と“教育環境評価傾向”の第2成分における両変数群の関係からは、社会的意識の強い学生は大学環境の認知においても個の確立を育成する側面を高く評価しており、一方、第3成分における両変数群の関係からは、遊び楽しむことを重視する学生は学内の規律や授業の知的レベルを低く評価していることが見出された。最後に、日常的・具体的な“行動的価値志向”と抽象的・観念的な“観念的価値志向”では、前者の方が“教育環境評価傾向”と強い関連を持つことが明らかになった。

3. 2. 社会心理学的研究

——価値志向と教育環境の時代的変遷——（研究V、VI）

価値志向の形成は、個人の自己実現的側面であるとともに社会化の側面とも考えられる。すなわち、社会変動によって、その時代における人々の価値志向は影響を受ける。青年期は、社会の中における自己の位置づけを模索しようとする時期なので、このような社会変動の影響が特に大きいと思われる。

大学の構成員である学生の価値志向のみならず、大学の環境も国の政策や経済状態によってその経営が影響されるため、社会変動の影響から免れない。時代とともに変化する特徴と、時代の変化にかかわらず維持される特徴とに注目することによって、その大学の個性や学風がどのように変化してきたかが明らかにされられると思われる。また、その大学の環境の変化は、学生の在学中における価値志向の形成・変容に対しても影響を及ぼしていると考えられる。

このように、急速な社会変動をもたらした戦後日本の移り行く時代の中で、（他大学の資料も参考にしつつ）ICUという1事例を通して、1960年代から1990年代に至るまでの日本の大学生の価値志向と大学環境の時代的変遷を実証してゆくことが本研究の目的である（研究V、VI）。

3. 2. 1. 研究 V. 大学生の人生観の時代的変遷⁵⁾

本研究においては、社会が目まぐるしく変動し、社会的規範が不安定である現代において、青年期後期に当たる大学生が如何に自らの“人生観”を形成していくのかを、過去の資料と比較しつつ検討することを目的とする。具体的には、“I-1. 人生観の因子構造”において異なる時代を通し比較的安定して抽出された4因子構造(“I. 慈愛奉仕”・“II. 内面生活”・“III. 積極行動”・“IV. 安楽多彩”[表2参照])を基に“人生観”の時代的変化ならびに在学中の変化を検討する。

Morris は比較文化的研究にとどまらず、1970年にも米国の大学生を対象に調査を行ない、1950年の資料と比較することによって大学生の“人生観”の時代的変遷について検討した(Morris, 1971)。その結果、この20年間に大学生の好む価値観にはそれほど大きな変化がなかったが、伝統を重んじる“中庸”に対しては評価が低くなる傾向が見られた。因子に関していえば、両調査ともに“E. 自己耽溺”と“B. 社会的積極行動”が優勢なことになりはなかったが、1970年には“C. 内面的精神生活による自己満足”と“D. 受容協調・同情関心”を好む傾向が増加した。

一方、日本においても、大学生の“人生観”の時代的変遷についての研究が、九州大学の安藤(1978, 1990)とICUの岩崎・石塚・原(1984)によってなされている。

安藤(1978)は、日本における1949年、1964年、1973年の資料とアメリカにおける1949年、1971年の資料を比較し、この四半世紀に生じた我が国の大学生の価値観の変化を以下のようにまとめている。“戦後の十数年間[1949-1964]は、禁欲主義的生き方への選好を保持しつつも、大勢としては柔軟で多元的な生き方への傾斜を強めて、更に最近の十年間[1964-1973]においては、その傾向がいっそう増幅され、ついにはアメリカの価値のパターン(特に1971年)と、一見区別しにくいほどの類似を示すにいたっている”

5) 研究Vは、心理学研究66巻2号に掲載された資料論文の内容(岡林・大井・原, 1995)を加筆修正したものである。

(安藤, 1978, p.151)。彼はこのような傾向を“アメリカナイゼーション”と呼び、50年代から70年代にかけて日本の大学生が抱く“人生観”の変化に見られる特徴と考えている。しかし、1990年の論文(安藤, 1990)においては、1973年から1989年における大学生の“人生観”は、“アメリカ型への接近”だけでは説明しきれなくなり、“モデルなき変化”もしくは“固有の自己運動”の時代に突入してきているのではないかと論じている。

また、Troyer・藤田・北山・永野・原ら(1963)は、当時のICUの新入生全員とその両親を対象に、Morrisの質問紙を用いて調査を行い、更にそれから20年後の1983年に、岩崎・石塚・原らが同じ質問紙を用いてICUの学生を対象に調査をし、“人生観”の時代的変遷とICUの特徴を考察した(岩崎, 1984; 岩崎他, 1984)。その結果、ICUの学生は1963年も1983年も、行動と思索と楽しみのバランスのとれた生き方を高く評価し、外界から離脱した消極的な生き方を低く評価している。しかし、1963年と比べ1983年は、他者との協調や奉仕を嫌い、自己の欲求を抑えてまでも目標に向かって努力するよりは、安楽的で享乐的な生き方を好むようになり、この傾向は米国の大学生の50年代から70年代の傾向とよく類似していた。

50年代から80年代にかけて日本とアメリカにおけるこれらの研究が一貫して示している点は、伝統の軽視・個人主義的傾向・柔軟な態度を好む傾向へと大学生の抱く“人生観”が変化していることと言えるであろう。そこで、これらの傾向が90年代においても更に引き続き認められるか否かを調べるため、本研究においては、ICUにおいて60年代から90年代までの30年間に在学学生から得られた資料および日本の他大学で収集された資料を基に、大学生の“人生観”の時代的変遷について検討する。更に、大学生が抱く“人生観”が在学中に如何に変化するかについても各時代毎に比較検討する。これらのことは、移り行く時代の中で、大学生が如何に自らの価値観を形成してゆくのかという青年期の心理を理解する上に示唆を与えるものと思われる。

方 法

被験者 前記（2. 1. 被験者）の第1グループの内、60年代、80年代、および90年代のICU在学生のべ3,253名を被験者とした。また、九州大学を中心に今まで日本の諸大学で行なわれた“13の生き方”質問紙による調査資料（京都大学・東京大学・名古屋大学・日本大学・北星学園大学）を参考に用いた（以上の資料は土橋 [1982]、安藤 [1990] より転載した）。

質問紙 “13の生き方”質問紙を用いた（2. 2. 1. 人生観質問紙 参照）。

手続き 前記（2. 3. 実施手続き）の第1グループに対する手続きに従った。

結果および考察

まず分析に先立ち、本研究においては全被験者から抽出された因子構造（研究I-1、表2を参照）を基に、各因子毎に最大の因子負荷量（絶対値）を示した項目の評定得点の平均値を簡便因子得点とした（L4は第I因子の逆転項目と考えた）。そして、各年代におけるICUの大学1年生および日本の諸大学の大学生（土橋，1982；安藤，1990）の各項目における平均評定得点から平均簡便因子得点を算出し、各因子毎にICUと他大学における大学生の“人生観”の時代的変遷について比較した（図4-1～4）。

時代的変遷については、ICUにおいては全体として“I. 慈愛奉仕”と“IV. 安楽多彩”が好まれている。それに対し、“III. 積極行動”は評定尺度では“どちらでもない”を示す値（4点）であり、“II. 内面生活”はむしろ嫌われている。すなわち、被験者たちは、どの時代でも他者に奉仕する精神とモラトリアム傾向（小此木，1977）を好むが、内面的な精神生活を重視する生き方を嫌う傾向を見せている。さて、60年代から80年代へかけては“I. 慈愛奉仕”の減少と“IV. 安楽多彩”の増加という変化が見られたが、90年代には更にその傾向が増大している。このことから、60年代から80年代へかけて個人主義化と順応主義の台頭が見られ、それは90年代に更に増大

していると言えるであろう。おそらく、これは60年代後半から70年代にかけて起きた大学紛争の挫折により、一つの主義への傾倒を嫌うようになったことの表れと考えることができよう。

ICUにおけるこれらの結果を他の大学と比較すると、第Ⅱ因子は時代によらずに嫌われている、また60年代から90年代にかけて第Ⅰ因子が減少し第Ⅳ因子が増加する、という傾向は共通していると思われる。しかし、“Ⅲ. 積極行動”においては、ICUでは、時代によらず、ほぼ中点値（4点〔評定尺度では“どちらでもない”の値〕）を示しているのに対し、九州大学は60年代と70年代に高く、それが90年代には下がっている。おそらく、九州大学においては60年代と70年代にかけて（日本大学や名古屋大学においても50年代後半から60年代にかけて）学園紛争の影響による共産主義思想の蔓延が、ICUよりも大きかったためではないかと思われる。

これらの結果は、50年代から80年代にかけての日本における大学生の“人生観”の時代的変遷についての研究（安藤，1978；岩崎他，1984）が一貫して示していたところの個人主義的傾向、柔軟な態度を好む傾向への変化とほぼ同様のものであり、日本における大学生の“人生観”は、50年代から90年代まで、大勢としては同一方向へ変化してきていると言えるであろう。

なお、本稿では詳しく述べないが、各時代におけるICU大学生の在学中における人生観の変化について検討した結果、60年代は大学紛争、80年代はアパシーの蔓延に代表される大学環境の影響が推測され、時代とともに変化する大学環境が大学生の“人生観”の形成に影響を与える過程が明らかにされた。

以上のことから現代の大学生は、自らのパーソナリティの内的構造の一貫性を重視することよりも、むしろ、急速な社会的変化に対処するために、絶えず変容の可能性を持った柔軟な人間像を望んでいることが明らかになった。このように青年期の価値志向を通して、現代人の希求する“理想的人間像”とパーソナリティの形成過程を明らかにして行くことは、現代の心理学が求める実践的課題の一つであると考えられる。

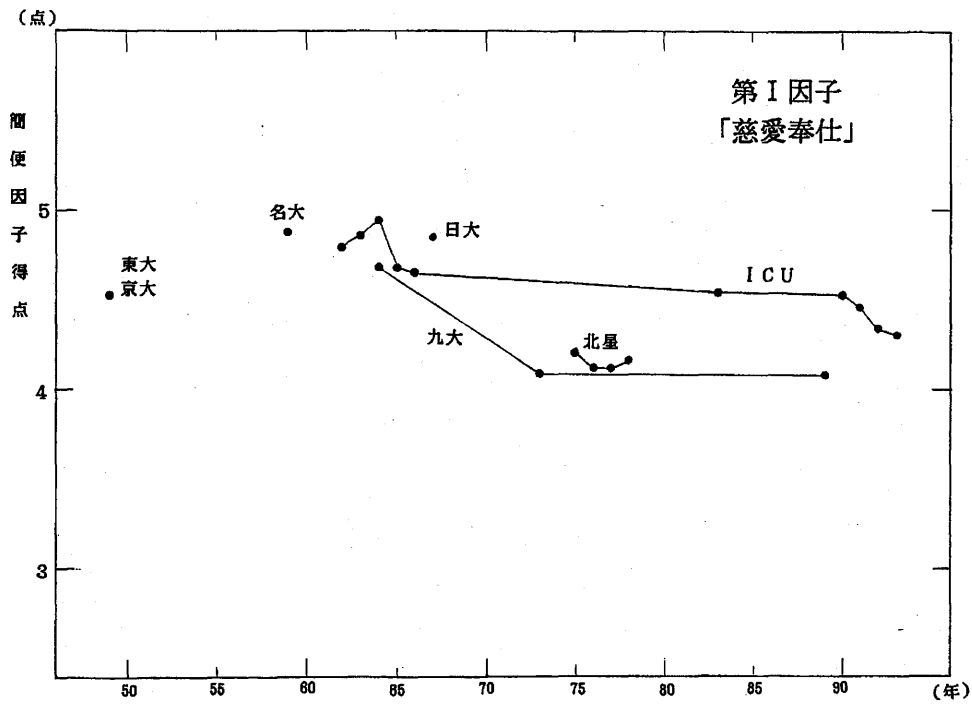


図 4-1 諸大学における大学生の人生観の時代的変遷 (第 I 因子)

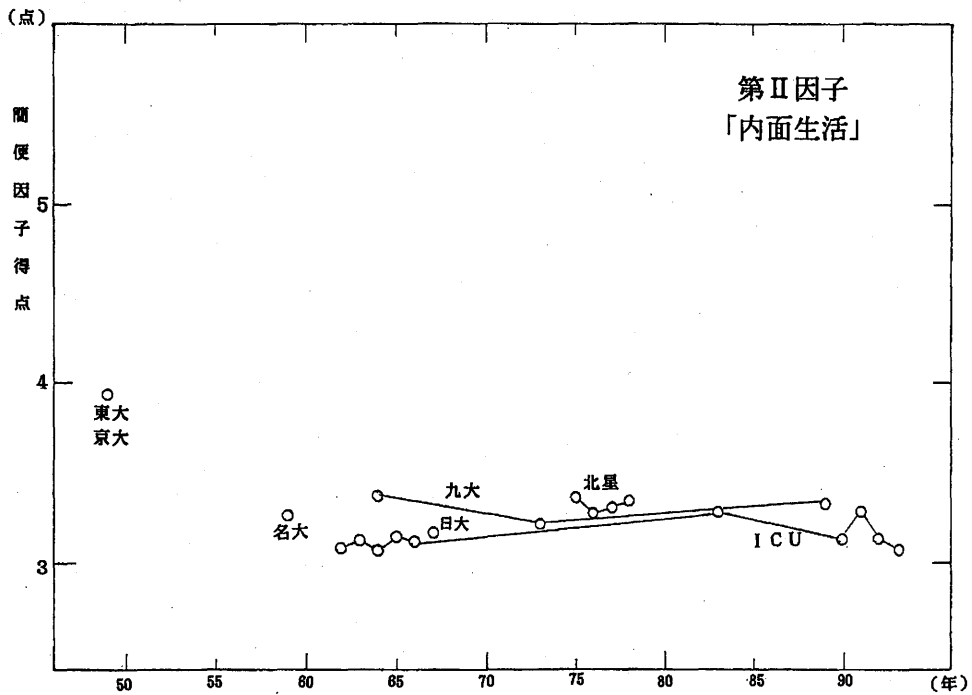


図 4-2 諸大学における大学生の人生観の時代的変遷 (第 II 因子)

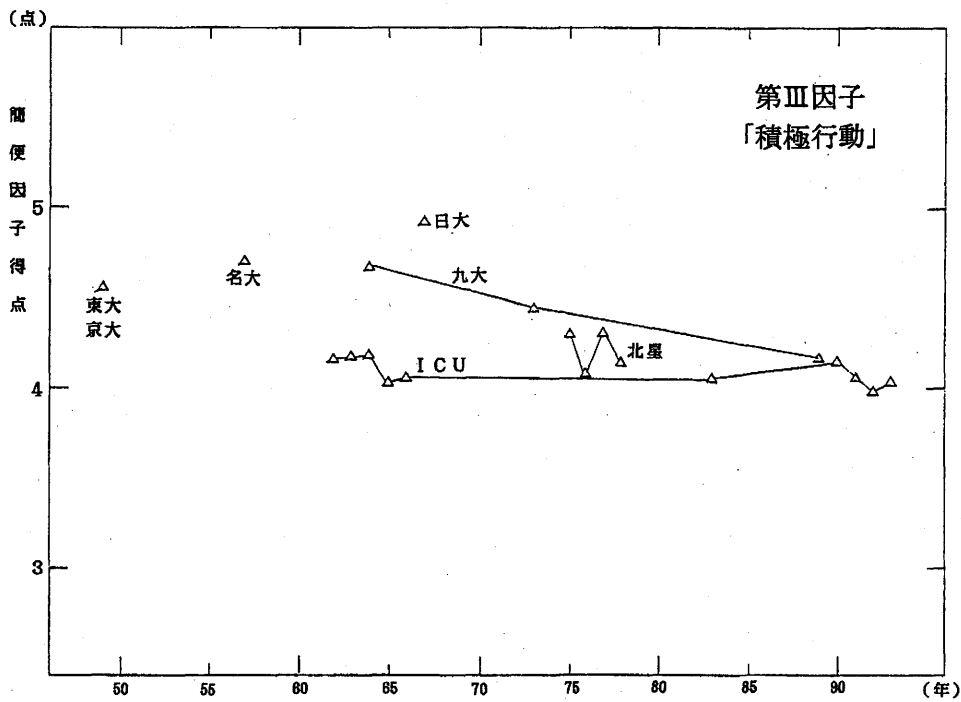


図4-3 諸大学における大学生の人生観の時代的変遷 (第III因子)

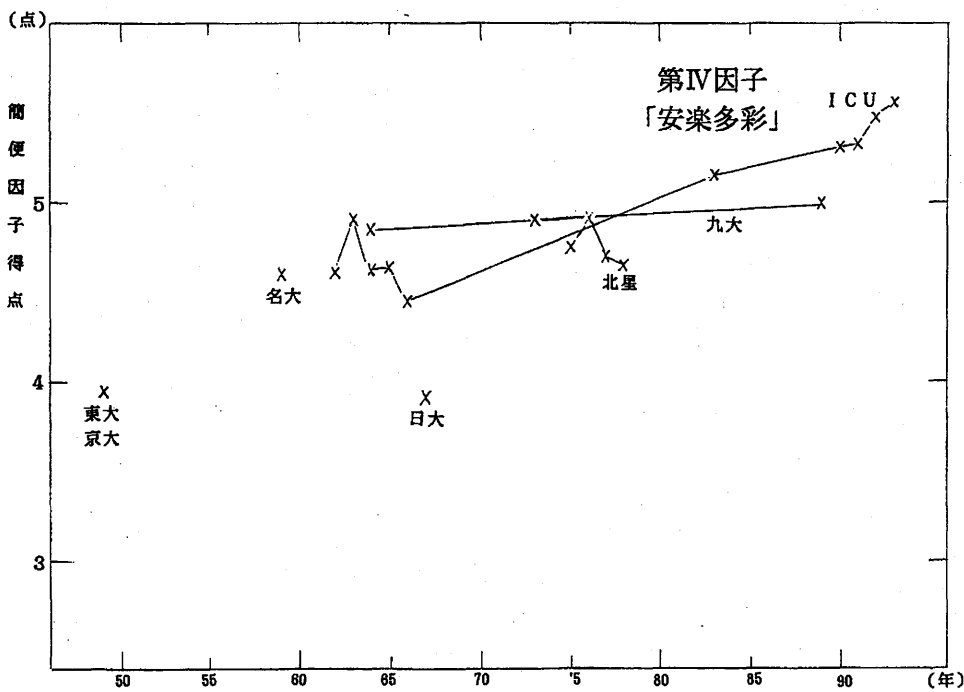


図4-4 諸大学における大学生の人生観の時代的変遷 (第IV因子)

3. 2. 2. 研究VI. 教育環境の時代的変遷⁶⁾

大学環境の研究は、Koffkaの“ゲシュタルト心理学”(1935)、Lewinの“場の理論”(1936)、Murrayの“欲求-圧力”理論(1938)などを基礎として1950年代の米国において生れた。例えば、PaceとStern(1958)は、大学をとりまく文化を諸々の個人の欲求とそれに対応している環境の圧力との複合であると考え、“College Characteristic Index”(“CCI”)を創案した。この“CCI”は30個の環境の特質を測定する評定尺度から構成されており、各々の評定尺度は上記の“欲求-圧力”理論の概念から導かれた“Activities Index”(“AI”)に含まれる30の性格欲求評定尺度に相応するものとして考案された。つまり、Murrayが個人の様々なパーソナリティを我々の欲求とそれに対する圧力との関係から捉えようとしたのと同じように、大学の性格もまたその環境圧力と、そこにおける学生の様々な要求との関連において調べる必要があると考えたのである。しかし、その後の研究から、“CCI”に含まれる多くの環境圧力評定尺度は、性格欲求評定尺度と対応するものではないこと、すなわち、有機体とみなされた環境はいろいろな面において様々な性格を持つ個人が集って作りだす構造とは異なっていることが判明した(Pace, 1967)。

そこでPace(1967)は、大学の環境を構成するいろいろな変数は、個人的性格の要因として仮定される心理的内容ではなく、そこで計画実行されている教育活動の内容によって定義されるべきものであるという仮説を立て、この考えに基づいて“CCI”に因子分析による検討を加え、“College and University Environment Scales”(以下“CUES”と略称)を開発した。従って、“CUES”は、大学間の知的、文化的、そして社会的雰囲気の違いを明確に示すものと考えられ、大学生活を5領域、すなわち、“A. 実用性”・“B. 学究性”・“C. 共同性”・“D. 礼儀性”・“E. 自覚性”に分け、各々につきそれぞれ30項目、計150項目の質問項目を設けて構成

6) 研究VIは、国際基督教大学教育研究36巻に掲載された研究論文の内容(岡林・大井・原, 1994a)を加筆修正したものである

したものである。各領域の構成内容は以下の通りである。

- “A. 実用性” (practicality) : 個人的地位や実利などが強調される程度。
- “B. 学究性” (scholarship) : 学問的意欲、知的関心などが強調される程度。
- “C. 共同性” (community) : 共同体としての意識や実体が存在する程度。
- “D. 礼儀性” (propriety) : 礼儀正しさや、思慮深い行動が評価される程度。
- “E. 自覚性” (awareness) : 自己の探究、政治的関心、創造的・芸術的関心が強調される程度。

なお、領域Dの元の用語“propriety”は、内藤(1981)によって“妥当性”と訳されていたが、統計的概念と紛らわしいために本研究では“礼儀性”と改称した。同様に領域Eの“awareness”は“意識性”と訳されていたが、意味内容を適切に表すために本研究では“自覚性”と改称した。

さて、我が国においては、平木典子がPaceの“CUES”を基に100項目よりなる日本語版“CUES”を作成し、立教大学において1972年から1980年に至るまで7回にわたり継続的に実施してきた(内藤, 1981)。その他にも、この日本語版“CUES”を用いた研究は、関西学院大学と北星学園大学(土橋, 1979)でも行われている。またこれとは別に、ICUにおいても同じPaceの“CUES”を基に4段階評定尺度を備えた“Japanese University Educational Environmental Scale”(“JUEES”)が作成され、1976年9月、在学生1,335名によるICUの教育環境に対する評価の測定が行われた(原・牧野・松村・村山・島田, 1980; 牧野, 1977; 松村, 1977; 村山, 1977; 島田, 1977)。この“JUEES”では日本の諸大学の教育環境を比較評価するため、次のような手続きの下で質問紙が作成された。まず、“CUES”に含まれる全質問項目を日本語に翻訳し、次にアメリカと日本の大学における文化的差異を勘案して意味が不明確ないしは回答が困難であろう

と予想される項目を削除し、その結果5領域、各15項目、計75項目を選び出したものである。なお、回答の形式に4段階評定尺度を用いた点が、原版および日本語版と大きく相違する点である。

1983年には、ICUでも他大学との比較を容易にするため“CUES”を用いて教育環境の調査を行い、他大学（北星学園大学・立教大学・関西学院大学）との比較を試みた（植田，1984；植田・石塚・原，1984）。当時1,800人の在校生の中から無作為に選んだ829人に質問紙を配布し、305名から回答を得た。その結果として以下の4点が挙げられた。（1）ICUにおいては“D. 礼儀性”が最も高く評価され、次いで“E. 自覚性”・“B. 学究性”と続き、“C. 共同性”と“A. 実用性”は比較的低く評価された。（2）ICUで得られた“B. 学究性”と“E. 自覚性”の得点は他の大学よりも非常に高かった。（3）ICUの学生の評価は、立教大学または関西学院大学の評価とは僅かに異なるが、北星学園大学の学生の評価と類似していた。（4）ICUの学生のみが、教育環境の評価において、ミネソタ大学の学生と共通したのが見られた。

1976年と1983年の調査から共通に浮び上がるICUの特徴は“D. 礼儀性”、次いで“B. 学究性”と“E. 自覚性”が高く、“C. 共同性”と“A. 実用性”が低いことであり、これらは“基督教主義の大学としての宗教的雰囲気を保ちつつ個の確立を目指す”というICUの学風が70年代後半から80年代前半にかけて維持されていることを示しているように思われる。

しかし、最年10年間の日本においては非常に急激な社会変動がみられ、大学がその影響からひとり独立であるとは考えられない。従って80年代から90年代にかけて大学の教育環境にもかなりの変化が見られると思われる。本研究の目的は“CUES”によって、学生の意識上に表れた心理的環境としてイメージされる大学像を調査することを通して、ICUの10年前（1983年）と現在（1993年）に至るまでの時代的変遷を検討することである。このことは、本学の在り方を見直すための一資料として、本学における自己評価活動の一端に貢献するものと思われる。

方 法

被験者 ICUにおける1983年度と1993年度の2年生以上の在学生の資料を用いた（1983年度203名；1993年度384名）。

質問紙 “CUES”を使用した（2.2.5.教育環境質問紙参照）。1983年度には2件法、1993年度には4件法を用いた。

手続き 通信用ボックスを通して質問紙を配布し回収箱を設けて後日回収した。1993年度においては、1983年度の資料と比較するために4件法で得られた各被験者の評定得点を2件法に換算した。更に、5つのカテゴリー（各15項目）毎に、時代別の平均カテゴリー得点および標準偏差を求めた。

結果および考察

各項目における得点を各カテゴリー毎に加算しカテゴリー得点を算出し、1983年と1993年のそれぞれの被験者群の平均カテゴリー得点を図5に示した。図5より“B. 学究性”の増加（ $t=5.11$, $df=550$, $p<.001$ ）ならびに“A. 実用性”と“D. 礼儀性”の減少（ $t=5.63$, $df=549$, $p<.001$ ； $t=7.35$, $df=546$, $p<.001$ ）が、1983年度から1993年度に至る時代的变化の特徴である。そして“E. 自覚性”は両年代とも高

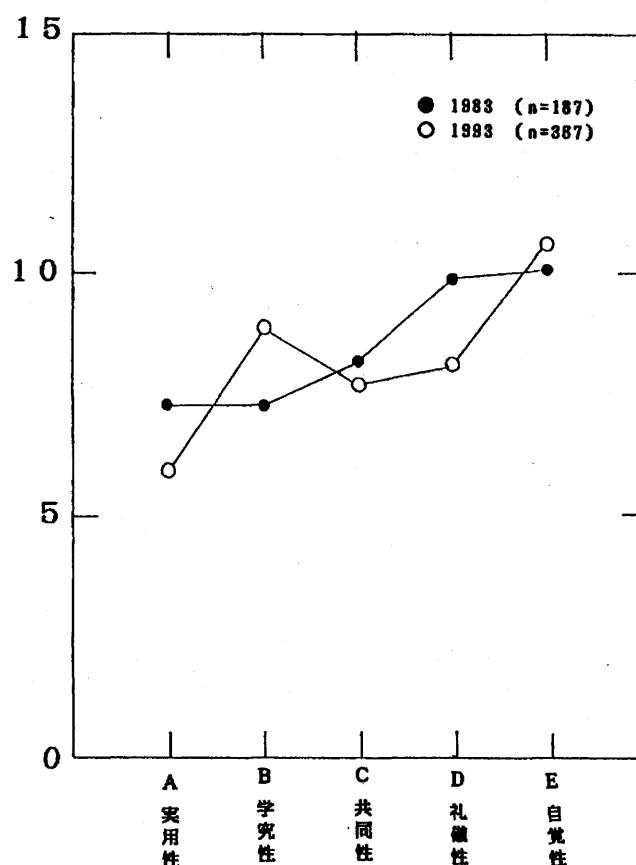


図5 ICUにおける1983年度と1993年度の教育環境

いレベルで維持されていた。

まず、ポジティブな特徴として、“B. 学究性”の増加と“E. 自覚性”の維持が指摘され、学生の知的関心が伸び伸びと育てられ、個としての自覚を高め得る環境としてICUが機能している様子が浮き彫りにされた。このことは、1983年度と1993年度の両時代において他大学と比較した際にもICUの特徴として際立っており、最近の他の調査研究における大学満足度調査（リクルート、1992）でICUが第一位になった原因の1つであろう。

また、ネガティブな特徴として、“A. 実用性”の減少が見られ、学内の資料や設備、そして学生に対する日常的サービス（福祉・講演会・社交）などという、大学のソフト・ハード両面におけるサービスが時代遅れとなっていることが窺われる。“D. 礼儀性”の減少から、大学に対する帰属意識の低下によって、そこでの規則や礼儀を軽視する風潮が増大し、基督教主義の大学としての特徴が失われつつあることが見出された。

4. 今後の課題と展望

本研究においては、異なる水準の価値志向の関係、価値志向と認知的特徴との関係という、パーソナリティの内的構造における関連を、大学生という集団に対して質問紙調査法を用いて検討することを試みた。このような調査法によるマクロなアプローチは、コンピューターの発展によって大量のデータを瞬時に処理することが可能になったため最近よく用いられている。しかし、パーソナリティ研究においては、かつてSmith, Bruner & White (1956)が行なったように綿密な面接や検査によって一人一人の意見を充分聞き各検査結果を総合して個人を理解しようとする“事例研究”によるミクロなアプローチも必要と考えられる。また、Smithらの時代には文章による記述によってしか表現できなかった個人のパーソナリティの内的構造も、現代においては多変量解析の技術の発展によって統計的に記述することが可能となって

きており、事例研究の最大の問題点である“客観的な記述”がかなりの程度で可能となってきたと考えられる。今後の課題としては、調査法によって集団の中から統計的に見出される構造を明らかにするとともに、個人の内部から見出される構造を多変量解析の技術を用いて多面的かつ客観的に明らかにしてゆくことが、パーソナリティ心理学の更なる発展のために必要となると思われる。

また、本研究は、主としてICUの大学生によって“人生観”の時代的変遷について論じており、事例研究の意味合いが強い。しかし、その目指すところは、日本の大学生の価値志向の時代的変遷について一般的な傾向を見出すことであり、それに近づくために過去の研究者の資料をまとめつつ比較することを試みた。しかし、このような研究を単独の研究者で行なうことには限界があり、多くの大学間で研究者の協力体制を作ることが必要であろう。そうすることによってはじめて、大学差・地域差というものを勘案した青年心理学の研究を継続的に行うことが可能になると思われる。このような大学間の研究者の協力体制をつくらなくては、青年期後期の発達の問題について普遍的な見解を提出することは不可能であると思われる。大学間にある諸々の垣根を乗り越えて、共通の課題に携わる研究者が協力しあってゆくことが、今後の青年心理学、教育心理学の発展のためにも必要であろう。

5. 結論

5. 1. パーソナリティの内的構造の一貫性

“行動的価値志向”と“観念的価値志向”との間、また両価値志向（特に“行動的価値志向”）と“教育環境評価傾向”との間に、それぞれ意味のある対応関係が見出されたことから、大学生の価値志向の具体的・日常的水準と抽象的・観念的水準、および日常の環境認知において、共通の基盤が存在す

ることが示唆された。また、“機能的次元”（“行動性”）において異なる水準の価値志向において、“時間的パースペクティブ”と“社会的パースペクティブ”からなる“構造的次元”における対応が見られ、本研究の前提とした理論モデルの適切さがある程度確認された。すなわち、これらのことから、個人の中に、階層的な価値志向の体系が存在し、個人の外的環境に対する認知もそれによって一貫するようにコントロールされていることが示唆された。これらは、総てパーソナリティの内的構造の一貫性を保たせようというメカニズムの作用と考えられる。これらのことは、正準相関分析を用い各変数群を分けて分析したことによって明確に見出された。

5. 2. 大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷

日本の複数の大学における全体的傾向として、50年代から80年代にかけての大学生は、彼らの価値志向を、個人主義と柔軟な態度を好む傾向へと変化させてきたと考えられる。

それと共に、ICUにおいては、80年代から90年代までに、彼等が認知する“教育環境”の、道徳的・規範的・宗教的雰囲気が増少してきた。つまり、社会集団を維持するために必要である規範（道徳・宗教）を重視する傾向が増少し、个人中心主義が際立って増加してきている。

これらのことから、現代の大学生活においては“個”を越えた価値を見出すことが困難になってきたと考えられる。

6. 文献

6. 1. 引用文献

Allport, G.W. & Vernon, P.E. (1931). *Study of value*. Houghton.

- Bruner, J.S. & Goodman, C.C. (1947). Value and need as organizing factors in perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 42, p.33-44.
- 青木孝悦 1974 「価値」 青木孝悦・萩原滋・箱田裕司 関東出版社 『資料中心一般心理学』 Pp.124-132.
- 安藤延男 1978 「青年学生の心理」 佐久間章・安藤延男（編著） アカデミア出版会 『人間行動の心理学的考察』 Pp.145-170.
- 安藤延男 1990 「戦後四十余年間に見られた日本の大学生の価値観の変容——Morrisの生き方尺度による追跡——」 九州大学教養部カウンセリング学科 『カウンセリング学科論集』第4輯 93-109.
- 土橋信男 1979 「大学の教育的環境の継時的変化——1977年から1979年における北星学園大学の教育環境について——」 『北星論集』17 115-153.
- 土橋信男 1982 「価値観の形成」 原谷達夫・安藤延男（編著） アカデミア出版会 『青春からの出発——人間開放への青年心理学——』 Pp.98-116.
- ゴードン, L.V. 菊池章夫 1981 『増補版 価値の比較社会心理学』 川島書店
- 原 一雄・牧野文恵・松村治子・村山興子・島田博美 1980 「国際基督教大学における教育環境調査の試み」 国際基督教大学 『教育研究』23 112-127.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1991 「大学生の価値観（1）人生観・宗教倫理観・政治経済観研究の一方法論」 『日本心理学会第55回大会発表論文集』 624.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1992 「ICUにおける大学生の価値観研究」 国際基督教大学 『アジア文化研究』別冊3 91-100.
- 原 一雄・大井直子・岡林秀樹 1993 「大学生の価値観（6）SD法による分析」 『日本心理学会第57回大会発表論文集』 34.

- 岩崎正子 1984 「ICU生の人生観の調査研究」 『国際基督教大学教養学部卒業論文(未公刊)』
- 岩崎正子・石塚正一・原 一雄 1984 「ICU在学生の人生観の調査研究」 国際基督教大学 『教育研究』26 85-106.
- 梶田叡一 1990 『生き方の心理学』 有斐閣
- Koffka,K. (1935). *Principles of gestalt psychology*. Harcourt, Brace.
- Lewin,K. (1936). *Principles of topological psychology*. New York: McGraw-Hill. (外林大作・松村康平 [訳] 1942 トポロジー心理学の原理 生活社)
- 牧野文恵 1977 「教育環境についての一研究——パーソナリティ次元と教育環境評価の関係について——」 『国際基督教大学教養学部卒業論文(未公刊)』
- 松村治子 1977 「教育環境の調査研究——教育環境認知と生育環境及びICUの予備知識の関係について——」 『国際基督教大学教養学部卒業論文(未公刊)』
- 見田宗介 1966 『価値意識の理論』 弘文堂
- Morris,C. (1956). *Varieties of human values*. Chicago Univ. Press
- Morris,C. & Small,L. (1971). Changes in conceptions of the good life by American college students from 1950 to 1970. *Journal of Personality and Social Psychology*, 20, (2), p.254-260.
- 村山興子 1977 「教育環境の調査研究——大学生の価値志向と学園雰囲気認知についての一考察——」 『国際基督教大学教養学部卒業論文(未公刊)』
- 村山 繁 1976 「価値観の6次元——因子的真実性の原理による尺度構成——」 『関西大学社会学部紀要』7(1) 161-174.
- Murray,H.A. (1938). *Explorations in personality*. New York: Oxford Univ. Press. (マレー H.A. 著 外林大作 訳編 1961 パーソナリティ I ; 1962 パーソナリティ II 誠信書房)

- 内藤 武 1981 「大学環境調査(キューズ)とは」 『大学時報』30(156) 84-93.
- 岡林秀樹 1991 「大学生の人生観と学生生活に対する態度との関連について」 『国際基督教大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)』
- 岡林秀樹・原 一雄・大井直子 1991 「大学生の価値観(2)人生観の時代的変遷」 『日本心理学会第55回大会発表論文集』 625.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1992 「大学生の価値観(4)人生観の時代的変遷(Ⅱ)」 『日本心理学会第56回大会発表論文集』 157.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1993 「大学生の価値観(8)人生観質問紙の簡略化」 『日本心理学会第57回大会発表論文集』 36.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1994a 「ICUの教育環境の時代的変遷——1983年度と1993年度の比較——」 国際基督教大学 『教育研究』36 125-139.
- 小此木啓吾 1977 『モラトリアム人間の時代』 中央公論社
- 大井直子・原 一雄・岡林秀樹 1991 『大学生の価値観(3)人生観の縦断的研究』 『日本心理学会第55回大会発表論文集』 626.
- 大井直子・岡林秀樹・原 一雄 1992 「大学生の価値観(5)人生観の縦断的研究(Ⅱ)」 『日本心理学会第56回大会発表論文集』 158.
- 大井直子・岡林秀樹・原 一雄 1993 「大学生の価値観(7)人生観の縦断的研究(Ⅲ)」 『日本心理学会第57回大会発表論文集』 35.
- Pace,C.R. (1967). *College and university environment scale* (2nd edition). Princeton,N.J.: Educational Testing Service.
- Pace,C.R. & Stern,G.G. (1958). An approach to the measurement of psychological characteristics of college environments. *Journal of Educational Psychology*, 49,(5), p.269-277.
- リクルート 1992 「在学生による「大学別満足度調査」」 リクルート社 『カレッジマネジメント』52 4-38.
- Rokeach (1973) *The nature of human values*. Free Press.

- Rosenberg, M. (1957) *Occupational choice and values*. Glencoe: Free Press.
- 島田博美 1977 「教育環境の調査研究——ICU在学生による教養学部の評価に関する一考察——」 『国際基督教大学教養学部卒業論文（未公開）』
- Smith, M.B., Bruner, J.S. & White, R.W. (1956). *Opinions and personality*, John Wiley & Sons, Inc.
- 高木秀明・加藤隆勝 1980 「「生き方の世代差」について（2）」 『日本教育心理学会第22回総会発表論文集』10 210-211.
- 高木秀明・加藤隆勝 1983 「「生き方」の種類と世代差について」 青年心理学研究会（編） 福村出版 『現代青年の心理』 Pp.51-69.
- Troyer, M.E.・藤田恵璽・北山雅子・永野俱子・原 一雄 1963 「大学生の価値観に関する研究」 『教育心理学年報』3 9-10.
- Troyer, M.E.・藤本隆志・藤田恵爾 1964 「日本人学生の宗教的価値志向について」 国際基督教大学 『基督教文化学会年報』11 67-82.
- 植田淳子 1984 「ICUの教育環境評価についての一研究——下位集団および他大学との比較——」 『国際基督教大学教養学部卒業論文（未公開）』
- 植田淳子・石塚正一・原 一雄 1984 「ICUの教育的環境の調査研究——他大学との比較——」 国際基督教大学 『教育研究』26 65-83.
- 山田豊明・浅井邦二 1989 「価値観尺度に関する研究」 『日本心理学会第53回大会発表論文集』 209.

6. 2. 著者による博士論文提出後の発表論文

- 石田純子・岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1994 「大学生の価値観（11）——海外在住経験の有無による比較——」 『日本心理学会第58回大会発表論文集』51.
- 岡林秀樹 1994 「大学生の価値志向の構造」 『日本青年心理学会第2回

- 大会発表論文集』 24-25.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1994b 「大学生の価値観（10）——観念的価値志向と行動的価値志向との関連——」 『日本心理学会第58回大会発表論文集』 50.
- 岡林秀樹・大井直子・原 一雄 1995 「大学生の人生観の年代的変遷」 『心理学研究』 66（2） 127-133.
- 大井直子・岡林秀樹 1995 「大学生とその両親の人生観における関連性とその時代的变化」 『日本発達心理学会第6回大会発表論文集』 219.
- 大井直子・岡林秀樹・原 一雄 1994 「大学生の価値観（9）——大学生と両親の人生観に見られる時代的变化——」 『日本心理学会第58回大会発表論文集』 49.

**Diachronic Changes
of College Students' Value Orientation and
Educational Environment
(English Résumé)**

Hideki Okabayashi

Purpose

The present study examines the diachronic changes of college students' value orientation and educational environment in terms of two aspects: (1) personality psychology and (2) social psychology. The following are the six research studies planned to be conducted:

(1) Analyses from Viewpoints of Personality Psychology

Research I. Structure of Conceived Value Orientation

Research II. Structure of Operative Value Orientation

Research III. Relationship between Conceived Value Orientation and Operative Value Orientation

Research IV. Relationship between Value Orientation and Evaluative Tendency of Educational Environment

(2) Analyses from Viewpoints of Social Psychology:

Diachronic Changes of College Students' Value Orientation and
Educational Environment

Research V. Diachronic Changes of College Students' Views of Life

Research VI. Diachronic Changes of Educational Environment

(1) The first purpose is to offer a comprehensive theoretical model of the structure of value orientation and to offer an empirical explanation of the model. For the discussion of this purpose, the following procedures will be taken. First, the issue of differentiation between the contents (the structural dimension) and the superficial forms (the functional dimension) of the value orientation, which have not been clearly defined until now, will be reviewed (Research I,II,III). Next, the relationship between individual students' value orientation and their perception of their educational environment will be discussed (Research IV). Finally, all the issues involving the relationship between various value orientations in individuals and individual perception of their educational environment will be discussed as the major problems of personality psychology.

(2) The second purpose is to demonstrate the diachronic changes of the college students' value orientation and the students' perception of the educational environment of their colleges. In modern society, the social environment is changing rapidly, and the most important problem for these students is how to adapt themselves in such a rapidly moving society. To discuss them, we must answer the following questions. From the Second World War on, how has the value orientation of Japanese college students changed (Research V)? How has the college environment, where students spend their daily life, changed not only physically, such as the increasing number of students or the expansion of facilities, but also psychologically from the viewpoint of the campus atmosphere of the university (Research VI)? Thus, these issues dealing with the diachronic changes of college students' value orientation and educational environment will be discussed as social psychology problems.

Method

The subjects were categorized into two groups by the time in which the questionnaires were conducted and the types of questionnaires employed. Group 1 for Research I, V, and VI, and Group 2 for Research II, III, and IV were used as subject groups. Group 1 consisted of 4,089 in total, including 3,253 ICU students in the 1960s, 80s, and 90s, and 743 parents and 93 graduates. In the 1960s and 80s, the individual responses to the following four types of questionnaires were re-analyzed, which the previous researchers had collected. While all the subjects responded to the questionnaire of "13 Ways to Live", some of them also responded to the questionnaires of "Religious and Ethical Ways", "Political and Economic Ways", and "College and University Environment Scales". Group 2 was composed of 953 students in total, including 591 students of ICU, 130 students of K University and 232 students of C Junior College in 1993. They all responded to the following three types of questionnaire: (1) an abridged version of the questionnaire of "13 Ways to Live", (2) a questionnaire of "Students' Value Orientation toward College Life", and (3) "College and University Environment Scales".

Results and Conclusion

Since there was a meaningful relationship between "Operative Value Orientation" and "Conceived Value Orientation" (Research I, II, III), and also between both of these two value orientations (especially "Operative Value Orientation") and the "Evaluative Tendency of Educational Environment" (Research IV), it was suggested that there existed a common basis for the students' value orientation in both levels (i.e. daily and concrete, abstract and conceived), and the perception of their daily environment. Furthermore,

after examining the students' value orientations on different levels of the functional dimension (behavioral tendency), the results indicated a certain degree of appropriateness of a theoretical model on the structural dimension consisting of both a time perspective and a social perspective. This finding suggested that each individual had a hierarchical value orientation system internally, and this system controlled his or her perception of the external environment to maintain consistency. All the facts mentioned above could be viewed as the effect of a mechanism which intended to maintain the internal consistency of personality. Also those facts were proved clearly by differentiating the variable groups by canonical correlation analysis.

It was possible to say that Japanese college students as a whole had gradually changed their preference in favor of individualism and a flexible attitude from the 1950s to the 80s (Research V). Along with those changes, the moral, prescriptive and religious atmospheres of the educational environment they perceived have been losing ground significantly at ICU from the 1980s to the 90s (Research VI). In other words, while the importance of moral and religion norms, which is necessary to maintain a social group, has been deteriorating, the trend towards individualism has been growing more and more obvious. It seems, therefore, that the values beyond the individual interests have lost ground in the modern college life.